

## 平成30年度アドバイザー派遣事業 実施レポート

- 1 研究団体名 江府小・日野郡小教研国語部研修会
- 2 日 時 平成30年11月27日（火）9：30～16：30
- 3 会 場 江府町立江府小学校（日野郡江府町小江尾62）
- 4 アドバイザー 白水 始 氏（東京大学 高大接続研究開発センター 教授）
- 5 参加人数 13名
- 6 研修テーマ かかわり合い、自分の学びを深める児童の育成  
～一人ひとりが表現し、考えが深まる授業デザイン～
- 7 ねらい 研修テーマに迫る授業をめざすため、学習科学の立場から、主体的・対話的で深い学びを起す授業デザインのあり方と、次の実践につながる授業研究の進め方を研修し、授業改善に生かす。

### 8 研修の概要

#### （1）公開授業①②（江府小全学級公開）及び指導助言

##### ＜全学級の公開授業に対する指導助言＞

- ・江府小の児童は、チャンスがあれば問題解決に向けて話し合うことができ、話し合えば考えが良くなる経験を積んできている。学びに向かう（チャレンジする）力が育っている。
- ・深い学びとは、「教科書に書いてあることが言える」段階から、「教科書の言葉と自分の経験などと結びつけて納得する」段階になることである。そのために考えを「聴く」こと、「聴き合う」ことが大切である。
- ・ゴールのイメージとして、最も大事にしておきたいことは何かをより明確にしておく。それによって、児童が何を考えればいいかが絞られ、ねらいにせまることができる。
- ・児童がどのように学んだかを見取り、想定と違うのであればどこをどのようにすれば良かったかという振り返りを行うことが授業改善につながる。



#### （2）公開授業③及び授業研究会（研究協議及び指導助言）

3年生の国語の授業を公開し、その後授業研究会を行った。今回は、事前検討会で授業を体験して、児童がどのように学ぶかを想定し、課題や教師の支援を検討してから授業を公開した。児童の学びを観察して、授業者の事前の想定との相違を確認し、その要因と改善案を協議した。それらをふまえて、授業デザインや支援に活かせるような気づきについて話し合った。

##### ＜公開授業③＞

単元名 世界の物語をしょうかいカードで伝えよう（東京書籍）  
教材名 「はりねずみと金貨」

##### 学習活動

- 1) 課題（はりねずみは、せっかく拾った金貨を、なぜ道ばたにおいて帰っていったのか）を確認する。

- 2) 課題に対する学習前の自分の考えを書く。
- 3) 学習課題につながる3視点(からすと出会う場面、くもと出会う場面、子ぐまと出会う場面)をエキスパート資料として、各グループで考える(エキスパート活動)。
- 4) ABC担当が集まるグループに再編成し、意見をまとめる。(ジグソー活動)
- 5) 各グループで出た意見を発表し合い全体で意見を交流する(クロストーク)
- 6) 課題に対する学習後の自分の考えを書く。
- 7) 本時の学習を振り返り、次時の学習について知る。

#### <授業研究会>

学習科学の視点から、事前検討会で見取りの観点を具体化した上で、①授業者の事前の期待や児童の姿からどのような理解の深まりが見られたか(見られなかったか) ②子供の学びの実態を根拠にして、ねらいの達成に向けた学びを引き起こすために授業デザインや支援にどんな工夫が考えられるか ③自分の授業に生かせることは何かについてグループ協議を行った。

#### <指導助言>

授業の初めは、メインの課題に対して文章の記述からだけ解答していたが、クロストークの中で動物たちの行動とはりねずみの行動の関係を考え、K児が物語の深淵にふれる発言をした。S児の学びを追っても思考の深まりがよく見える。最後に「続きはどうなりそう?」「はりねずみは最後になんと言っていたかな?」等の問いが考えられる。



3年生でもここまで仲間の考えが聴き合えることが実証されていた。また、授業者が子供の発言を「聴く」ことが重要であるが、事前検討会で子供たちの学びをしっかり想定し、共有していたことが効果的であったと言える。

#### <講義 「授業前のシュミレーションと授業中の見取り」>

- ・アクティブラーニング型の授業では、「評価(=見取り)」が重要で、本時の授業(教材)の見直しと次の授業デザインにより、次の学びの質を上げていくことができる。
- ・見取りの観点を具体化することによって、学びの質を支える授業研究ができる。
- ・授業研究の進め方

- ① 授業でどんな学びが起きそうか、授業者の具体的な想定を参観者が共有する。
- ② ①と実際の子供の話すこと、書くことを比べながら観察。なぜ想定通り/想定外の事が起こっているのかを考察する。
- ③ 授業者の想定と子供の学びの事実とを比較して見えてきたことを共有し、次の授業に活かせそうな仮説を得る。

これをPDCAサイクルとして回す。

- ・めざす「学び」を引き起こす授業をうまくデザインする時、次の2点から教材検討する。

- ① 教科のねらいを教材に適切に具体化できているか。
- ② 子供が実際にどう学びそうか。

教材検討のゴールとして、本時で起こしたい学習イメージが具体化できると良い。

- ・授業(子供の学びの実態)から見直したいのは、次の2視点である。
  - ① 子供の教材や指示の受け取りは想定と比べてどうだったか。(学びの想定、妥当性)
  - ② 子供の学びはねらいと比べてどうだったか。(学習者の実態を踏まえた授業デザイン)
- ・以上のような、「学びの質を支える授業研究」を実現していきたい。